

◆常識をひっくりかえす岸田秀の「唯幻論」とは？

人間に関するもろもろの問題を説明し得る理論の出発点は、わたしの考えによれば、一つしかない。それは、ほかのところですでに繰り返し述べたように、人間が現実を見失った存在であるということである。現実を見失った人間は、おのおの勝手な私的幻想の世界に住んでおり、ただ、各人の私的幻想を部分的に共同化して共同幻想を築き、この共同幻想をあたかも現実であるかのごとく扱い、この疑似現実を共同世界としてかろうじて各人のつながりを保ち、生きていっているに過ぎない。（『ものぐさ精神分析』）

	常識(もしくは俗説・偏見)	岸田理論では…
本能	人類は万物の霊長である。 人間は言語や文化をもっており、 本能だけで生きている動物より優れている。	人間は本能が壊れた動物であり、 やむを得ず言語や文化をつくったに過ぎない。
現実	幻想や妄想の世界と「現実」を混同してしまう人がいるが、幻想(観念)の世界と「社会的現実」は別のものである。	自己、国家、神、貨幣、恋愛、性…すべては幻想であり、「社会的現実」も、一つの疑似現実には過ぎず、人間は幻想というオブラートに包んだ現実しか知り得ない。
正常 / 異常	社会に適応できない者、落ちこぼれた者、異常な人間が犯罪者となる。精神病者が気味悪がられるのは、何をするかわからない危険な人間だから。	社会は、自らが正常であるという幻想を保つために、正常でない者を排除する。精神病者が恐れられるのは、社会の「正常さ」が実は幻想ではないかと疑いを起こさせるからである。
人格	幼児や子どもと違って、正常な大人は妄想(幻想)にとらわれず、確固とした人格や現実感覚をもっている。	いわゆる正常な大人の人格も、その私的幻想の多くを抑圧し、一部分を集団の幻想と共同化することで、かろうじて支えられているに過ぎない。
性	「自然で正常な性」の発達が、何らかの異常な原因によって歪んだ人が「性倒錯者」となる。	もともと人間の性は倒錯している。人為的な努力や文化によって、無理に「正常者」に仕立てられる。
恋愛	正しい真実の恋愛とは1対1の関係であり、同時に複数の異性を愛するのは間違った恋愛である。(→近代のロマンチック・ラヴ・イデオロギー)	恋愛は幻想であり、「正しい真実の形式」があるわけではなく、普遍的な人間性に従った恋愛があるわけでもない。
恋愛	自分が理想とするタイプの異性を、互いに求め合い、結ばれることが恋愛である。	理想のタイプとは、幼児的な願望であり、手前勝手な期待であり、いやらしい性的好みであり、えげつない打算であり、その他もろもろである。
欲望	人間は、欲しいもの、やりたいことなど、これから先の未来に対して、さまざまな欲望や願望をもつ。	人間の欲望は、つねに自我の安定をめざし、過去の状態の再現を求める。(かつて挫折した過去の幻想を満足させようとするが、必ず挫折する)
親子	女性には母性愛がある。母は子のためにすべてを犠牲にして悔いず、子は母をいつまでも慕い続ける。	母性愛の神話や育児思想は、子育ての無理な負担を親に納得させるために文化的に規定された思想である。
心理学	心理学は、実験やデータの統計処理など科学的方法論に基づいた自然科学の一部門である。	心理学は、人間を物理化学的反応体として扱うことができるという迷信から出発した形而上学である。
歴史	人間の歴史を動かすのは経済的条件であり、人間の心理や意識の重要性は認めない。 (→マルクス主義、史的唯物論)	人間の心理や意識は、歴史を動かすもっとも重要な要因のひとつである。